〈第151回定期演奏会〉

Program Note

曲目解説「演奏をより深く楽しむために」
音楽評論：東条碩夫

スメタナ：連作交響詩「わが祖国」

全曲初演：1882年11月5日 プラハ

ボヘミアへの愛を迸らせた壮大な連作交響詩

スメタナは、その生涯に9曲の交響詩を完成している。最初の3曲「リチャード3世」「ヴァレンシュタインの陣営」「ハーコン・ヤルル」は、彼がスウェーデンのエーテボリで指揮者として活動していた時期の作品で、当時個人的に親交のあった大作曲家フランツ・リスト――多数の交響詩を書いていた――から大きな影響を受けたものと言われる。だが、スメタナが本当に彼らしさを発揮した交響詩は、そのあとに書いたこの6曲の連作交響詩「わが祖国」である。ボヘミアの素材を使い、ボヘミアの語法で、ボヘミアのために作曲されたこの作品こそは、スメタナが「チェコ国民楽派の父」と呼ばれるに相応しい大作であった。

しかし、この連作交響詩を書きはじめたちょうどその時期、彼は不気味な耳鳴りに悩まされていた。そしてほどなく、彼の聴覚は完全に失われてしまったのである。第1曲「ヴィシェフラド」は1874年11月18日に完成されたが、その総譜には「耳の病を患いつつ」と書かれてあった。そして第6曲「ブラニーク」は1879年に完成された。――こうしてスメタナは、ベートーヴェンと全く同じように、耳の聞こえない状態の中で、この大曲を世に送り出したのであった。

第1曲「ヴィシェフラド」（高い城）

初演：1875年3月14日　プラハ

詩人の竪琴が物語る古城の歴史

チェコの伝説的な吟遊詩人ルミールの竪琴がこの一連の物語の開始を告げる。

ハープで始まる主題が「ヴィシェフラドの主題」であり、この連作交響詩の中心テーマでもある。その冒頭の2つの音符は変ロ(B)－変ホ（Es）で、これはベドジフ・スメタナの頭文字「B・S」を織り込んだものと言われている。

ヴィシェフラドとは、プラハ市内の高い岩山の上にある古城（現在は城址）のこと。かつては栄華を誇っていたこの城に繰り広げられたであろう華やかな光景が描かれ、やがて戦乱のうちに城は落ち、瓦礫と化す。そのような歴史上の出来事がイメージ的に描かれて行き、いま寂しく響くのは往時をしのぶ吟遊詩人の竪琴のみ――。

第2曲「ヴルタヴァ」（モルダウ）

初演：1875年4月4日　プラハ

河の流れとその周辺の光景を描いた名曲

この連作交響詩の中で、というよりも、スメタナの作品の中で最も広く親しまれている名作。ヴルタヴァ河はのちにエルベ河と合流する。ドイツ語で「モルダウ」と呼ばれるのは、この曲が作曲されたころのボヘミア（チェコ）が、まだオーストリア＝ハンガリー帝国に属していたことによるものである。日本では、一般的には「モルダウ」の呼び名の方が親しまれているかもしれない。

山奥の二つの水源から発した小さな流れ（木管による揺らめき）は、やがて合体し、ヴルタヴァの河となって（有名な主題）長い旅を続けて行く。ある時は急流となって、森の中の狩の光景を見ながら進み、また他の時には農民たちが婚礼の踊りを繰り広げている場のすぐ傍を流れて行く。夜ともなれば、月の光を浴びて、きらめく水面に戯れる妖精たちがヴルタヴァ河の旅を彩るだろう（この個所の幻想的な曲想は素晴らしい）。やがて夜が明け、「ヴルタヴァの主題」が戻って来るが、今度は「聖ヨハネの急流」の場面で、波濤が岩を噛み、流れが渦巻く光景が描かれる。そしてヴルタヴァの河はついに幅広い流れとなってプラハ市内に達し、高い岩上のヴィシェフラドに挨拶を送りつつ（ヴィシェフラドの主題が壮大に高鳴る）、さらに遠く彼方へ旅を続けて行く。

第3曲「シャールカ」

初演：1877年3月17日　プラハ

男たちへ復讐する女兵士シャールカの物語

恋人に裏切られたシャールカは、すべての男たちへの憎悪を募らせ、復讐の機会を狙っていた。曲はそのシャールカの怒りを描く激しい楽想で始まる。彼女は一計を案じ、自らを森の木に縛りつけ、近づくツィティーラト軍を待つ。行進曲調の音楽に乗って進む兵士たちの前に、シャールカの姿（クラリネット）が木陰に見え隠れしながら浮かび上がって来る描写には巧みなものがある。司令官ツィティーラトはシャールカの美しい姿にたちまち魅力を感じ、恋に落ちる。陶酔の音楽。

やがてツィティーラトたちはシャールカを陣営に連れて帰り、陽気な宴を開く。民族色豊かな舞曲がそれを彩る。宴が進み、酔いつぶれて眠ってしまう兵士たち（ファゴットによるいびきのような効果）。

真夜中。寝静まった男たちの中で、シャールカがすっと身を起こす。陣営の周囲には、かねての作戦通り、アマゾネスの女軍がひたひたと迫っていた。シャールカの合図とともに、女軍は恐ろしい勢いでツィティーラトの陣営になだれこむ。不意を衝かれた兵士たちは為すすべもなく、大殺戮の渦の中に消える。シャールカの復讐は、かくして成った。

第4曲「ボヘミアの森と草原から」

初演：1875年12月10日　プラハ

ボヘミアの美しい自然を謳い上げる交響詩

「ヴィシェフラド」や「シャールカ」と異なり、この曲にはストーリー性はない。だが、作曲者はこのような意味のことを語っている――「ここでは、ボヘミアの景色を眺めた時に起こるすべての感情が音で表されている。森や草原からは、ある時は愉しく、ある時は哀愁に満ちて、歌が聞こえて来る。自然のすべてが歌われている。だれもが自分の好きなようにこの曲を聴き、解釈することができるのだ」。

第5曲「ターボル」

初演：1880年1月4日

宗教改革の先達ヤン・フスに因む町、ターボル

ターボルとは、南ボヘミアにある町の名で、15世紀初頭にフス教徒の運動の拠点になったことでも有名である。教徒たちの指導者ヤン・フス（1369頃～1415）はチェコの宗教思想家で、プラハ大学総長も務めたことのある人物だが、カトリック教会のあり方を非難して反抗し、宗教裁判にかけられ火刑に処せられた。彼の死後、その信奉者たちはフス教徒として団結、「フス戦争」を展開したのであった（戦争は1436年に講和で終結した）。

交響詩「ターボル」は、フス教徒たちの強い意志と戦いを讃える曲である。序奏の中に現れるフス派のコラール（教会歌）である「汝らは神の戦士」が全曲の重要な主題となる。この連作交響詩の中で、最も激烈な、劇的な曲想を持った作品だ。

第6曲「ブラニーク」

初演：1880年1月4日

祖国が危機に陥った時に現れる伝説の騎士たち

コラール「汝らは神の戦士」を前作からそのまま引き継いだ形で「ブラニーク」が開始される。ブラニークとはボヘミアのほぼ中央にある、深い森に囲まれた山のこと。古い言い伝えによれば、祖国が大危機に瀕した時、ブラニーク山に眠る聖ヴァーツラフ（10世紀のボヘミア公ヴァーツラフ1世、カトリックの守護聖人）の騎士たちが現れて国を救うであろう、とされている。

スメタナはこの聖ヴァーツラフをフスに置き換え、そのコラール主題を使用し、さらにいくつかの聖歌を織り込みつつ、大規模な愛国の交響詩に発展させた。全曲の最後にはあの「ヴィシェフラド」の主題が堂々と再現、かくして歴史と伝説とは現代において結合したのであった。テンポを速めて追い上げて行く全曲最後の熱狂的な昂揚は、この壮大な物語を閉じるに相応しい。彼方へ旅を続けて行く。

楽器編成	フルート2、ピッコロ、オーボエ2、クラリネット2、バスーン2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン2、バス・トロンボーン、テューバ、ティンパニ、大太鼓、シンバル、トライアングル、ハープ2、弦楽5部

作曲家プロフィール

ベドジフ・スメタナ

Bedřich Smetana 1824-1884

ボヘミアのリトミシュルに生れ、プラハで世を去ったボヘミア最初の国民的大作曲家。スウェーデンのエーテボリや故国のプラハで指揮者として活躍したが、50歳の時に聴覚を失い、最晩年には精神の平衡をも失って、病院で生涯を閉じることになる。この連作交響詩「わが祖国」と、オペラ「売られた花嫁」、弦楽四重奏曲第1番「わが生涯より」などが代表作として挙げられるが、その他にも多数のオペラやピアノ曲を残した。